

たまいたま

川柳



花火大会

令和4年 (2022年)
8月号 (No.753)

日川協加盟

巻頭言

歩荷とくさくさ

歩荷（ポツカ）という言葉をご存じだろうか。山を越えて荷を運んだり、山小屋へ物資を運んだりする事を仕事とする人である。

山歩きを楽しんだ頃、山頂や山道で、長い歴史を刻んだ祭祀用の祠や地蔵や里程などを目にする事が多かった。そんなとき、黙々と重い荷を運んだ往時の人々の存在が感じられた。

現在の歩荷も、草花や樹木や小動物の生きる気配を感じながら、同じように荷を運んでいる。苦を受容する彼らの精神構造は、素朴な利他の共同体に点る一隅の世界ではないだろうか。

古事記や日本書紀には、古代の多様な口承歌謡が記録されているから、その中には彼ら歩荷の呟きも記録されているかも知れない…：などと想像もしてみよう。

全てが急速に近代化してゆく時代に、永らく汗水流してきた多くの高齢者は、我利の生き方の空しさや利他の生き方の難しさを実感しているのではないだろうか。そんな生き方に、歩荷の姿を重ねることが出来る。しかしそれは、決して退行的な姿勢ではないと思える。そして日々目にする現在の短詩型作品の中にも、その意の表現を探ることができそうだ。

願法みつる

日日是好

上見ればきりがな山行く歩荷

山の水人も虫らも口をつけ

神々に愛でられて山汗

蟻んこを避けて人生捻挫する

血統をたどれば所詮八百万

約束手形端つから反故

回転木馬野暮な歴史書

仕掛けマイクで美味を礼賛

引くに退けない抜いたサーベル

独裁の楯神を引き出す